

## 研究計画・目的

この在外研究では、ドイツ・ベルリンを拠点として、沖縄とドイツの交流史に関する文献の収集を行うとともに、日独（沖独）交流史の歴史的な前提条件であったドイツの植民地主義についての知見を深め、かつ現代ドイツにおける植民地主義との批判的取り組みについても学ぶべく、各地の博物館を訪問し、様々な植民地主義関連の展覧会を調査した。

沖縄－ヨーロッパの交流史について、特に重点的に扱ったテーマは、宮古島におけるドイツ商船の座礁と島民による乗組員の救助（1873年）、またこれに謝意を表すとして1876年に宮古島に建立され、なおも宮古島市内に現存する「博愛記念碑」に関連する史実の調査である。なお当初はこれに加えて、ハンブルク民族学博物館（現在はローターバウム博物館 Museum am Rotherbaum）所蔵の、与那国島で1900年代に収集された民具についての現況調査も予定していたものの、これまで担当学芸員であったクネーデル氏が退職するタイミングと重なり、同氏が進める各種プロジェクトや後任への業務引継ぎなどの都合により、訪問の機会が得られなかった。ただ本件については、後任の学芸員への申し送りがなされる予定なので、日を改めて調査を進める予定である。このため在外研究では、博物館と植民地主義という、より大きな文脈で沖縄－ドイツ交流史を捉えるべく、近年ドイツで盛んになっている「私の町と植民地との関わり」についての郷土史的な調査の成果を学ぶとともに、各地の博物館が非西洋世界の人やモノをどう収集し展示していたのか、植民地主義との自己反省的な取り組みについても、各種の展覧会を訪問したり催しに参加したりすることで情報収集を行った。

## 研究活動、研究成果

・『水路学・海洋気象年報』（1876年）に、宮古島に記念碑を運んだドイツの砲艦「チクロープ号」の活動報告書の一部が記載されていることが判明したため、当該箇所を行った。これまでの研究により、同号が宮古島に來航する前に沖縄本島を訪れ、藩王（尚泰、但し病気を理由に、接遇は伊江王子朝直が担当）への答礼や謝礼品の贈答を行っていたが、『年報』からはこれに加え、同号がアメリカのペリー使節団の報告書（ドイツ人画家ヴィルヘルム・ハイネのスケッチも含む）やイギリス船サマラン号（後述）の記録や地図をもとに、那覇周辺や伊江島付近の海域も調査していたことがわかった。さらに、宮古島での記念碑建立の後も同島付近での地理学的・植物学的調査を行い、その後も同様の目的をもって石垣島、西表島にも來航していたことがわかった。また『年報』の付録には、西表島の船浮湾と宮古諸島の地図も含まれており、この地図から、彼らが伊良部島・下地島を2つの島とは認識していなかったことや、船浮湾を停泊に適した場所と見ていたことも明らかになった。

・連邦公文書館（ベルリン）の外務省関係資料「宮古島でのドイツ船の遭難と救助」、連邦軍事資料館（フライブルク）の海軍関係資料の閲覧、資料の読み込み。外務省文書は、資料

番号 RM901/12867、海軍の文書は資料番号 RM1/2579 である。前者は、宮古島で 1873 年に救助された船長エドゥアルド・ヘルンスハイムが台湾の淡水の代理領事に報告した事件の概要から始まり、記念碑建立のためのチクロープ号派遣の経緯、また通訳者の山村一蔵への記念碑の授与に至る一連の経緯が記されており、他方で砲艦チクロープ号の 1876 年の動きをまとめた後者には、艦長フォン・ライヒェの報告書をはじめ、海軍本部や江戸のドイツ公使とのやり取りを中心とした一連の文書が含まれている。

このように、「博愛記念碑」をめぐるドイツ側の資料には、外務省保存の資料と海軍の保存資料との二種類が存在することがわかり、前者はベルリン、後者はフライブルクにおいて原資料の閲覧とカメラ撮影を行った。その大半が手書き資料であるが、解読に際してはインスブルック大学の古文書アプリ transkribus を使用してブロック体への変換を行ったうえ、不明な個所は適宜ドイツ人研究者に問い合わせるなどして、概要の把握を行った。

チクロープ号が海軍本部に提出した報告書（1876 年 4 月）は、『南島』第三輯（台湾出版文化、1944 年）所収の江崎悌三の論文「宮古島のドイツ商船遭難救助記念碑」にも原文と訳文が掲載されているものの、報告書の原文との比較対照により、実は報告書の一部の内容が、江崎の論文には含まれていないことがわかった。特に、宮古島での記念碑建立後の動向についての記述は、江崎論文（正確には、ドイツ大使館が江崎に提供した資料）では全て割愛されている上、沖縄本島における調査に関する記述も段落単位で抜け落ちている。まさにこれらの割愛された箇所を読むことで、チクロープ号が「博愛記念碑」の設置という機会を活用して、琉球列島の調査を入念に行っていた様子が明らかになった。また江崎に対しドイツ大使館がこの部分を割愛したチクロープ号の報告書を提供した事実からは、その記載内容が琉球列島に対する当時のドイツの領土的な野心を示すものであり、日独の軍事的な接近という時局にとって不都合あると判断したとの解釈も成り立つであろう。

チクロープ号による調査の中でも特筆すべきは、同号が西表島の船浮湾における調査の結果、この島に石炭が埋蔵されている可能性について指摘していた点である。というのも、実際に船浮の北東、内離島（うちばなりしま）・外離島（そとばなりじま）を中心とした地域には実際に石炭があり、チクロープ号の訪問当時は未開発であったものの、琉球処分（1879 年）後には明治政府の主導により、囚人を用いた採掘が行われるようになるからである。既にペリー使節団も、琉球列島での石炭の所蔵に多大な関心を示しており、実際に同行した牧師のジョーンズ博士は、沖縄本島北部の塩屋湾（Shah-Bay）で石炭層を発見したと記しているが、チクロープ号もまた、これらの前例をもとに、石炭に着目した調査を行っていたものと考えられる。

・ロンドン・大英博物館での調査：1876 年の『水路学・海洋気象年報』には、付録として宮古諸島と西表島船浮湾の地図が掲載されているが、その注記には「イギリス海軍の地図 2104 番をもとに、チクロープ号が作成」とある。このことからチクロープ号はイギリス海軍の地図を参照しつつ、水深データなどを追加してこれをバージョンアップしていった様

子がわかる。この地図は、1842-1844年に琉球列島一帯を欧米船として初めて本格的に調査したイギリス船サマラン号（ベルチャー艦長）の水路学的調査から生まれたもので、ここには宮古諸島・八重山諸島の島々の地図も多数含まれている。そこで、大英図書館を訪問し、同館の地図部門の所蔵するこれらの地図の実物を閲覧し、写真撮影も行った。今後、サマラン号の作成した地図と、チクロープ号作成の地図とを比較することで、チクロープ号が沖縄への航海を通して、どこまで踏み込んだ地理学的調査を行っていたのかが解明できると考えている。

・ドイツの博物館における植民地主義との批判的な取り組みについての調査：在外研究期間中は、コロナによる行動制限も緩和され、ドイツ各地の博物館において植民地主義との取り組みが盛んになった時期でもある。この機会を利用して、以下の展示を見学する機会を得た：「フライブルクと植民地主義」（アルベルティーナ美術館、フライブルク）／「プロイセンと植民地主義」（プロイセン博物館、ミンデン）／「「これは植民地主義的です」展」（LWL博物館 Zeche-Zollern、ドルトムント）／「ハノーファーと植民地主義」（ハノーファー歴史博物館）／「植民地的主義プロイセン」（シャルロッテンブルク宮殿、ベルリン）／「「人間を展示する」展」（ドレスデン市立博物館）／衛生博物館の常設展（ドレスデン）。さらに、ベルリン市内のトレプトウ区、ラインケンドルフ区、シャルロッテンブルク＝ヴィルマースドルフ区の各区の区立博物館で開催された展覧会でも、自らの郷土と植民地主義との関わりを問い直しており、さらにベルリンの「博物館島」に新設された博物館「フンボルト・フォーラム」における展示内容にも、前身の「民族学博物館」の姿勢を批判的に検証する解説があり、調査を行った。

・各地の博物館における展示に共通する特徴として、「私たちの町と植民地主義の関わり」のように、地域性を重視して植民地主義の過去を問い直す展示が多い点が挙げられる。植民地獲得や運営に関与した郷土出身の政治家や実業家・地元企業などの活動の検証・「民族展示」や「植民地展」が行われた場所やそれを報じた新聞記事などの紹介、またその町に（強制的ないし自発的に）やってきた旧植民地出身者のライフヒストリーなどに着目し、植民地が日常のものであった時代の再現などもされていた。また植民地支配者の名前を冠した通り（一部は現在もそのまま）など、未完の問題でもあることを来訪者に喚起し、身近なテーマとして見せる工夫もなされていた。

これらの展覧会の展示内容を丹念に見学することによって、ドイツの植民地主義についての新たな知識を得られたのみならず、博物館自身の植民地主義との批判的取り組み、また過去の「博物学的」な活動の批判的検証、それに展示方法における様々な配慮（差別的な表現や描写を覆う、「トリガー」により注意喚起を行うなど）など、キュレーションの面でも多くの示唆を得ることができた。特に、Völkerschau「民族展示」については、明治政府もこれを国内での展示会に取り入れて「外地」の人々を「展示」したことで、いわゆる「人類

館事件」なども起きており、この点は「沖縄を展示する」ことの問題点を考える上でも重要である。

#### 今後の展望，教育への効果

現在、収集した資料をもとに、論文の執筆や発表の準備を行っているが、特にチクロープ号の石垣島と西表島への来訪に関しては新たな史実が判明したことで、単に宮古島とドイツの関係にとどまらず、八重山とドイツの関係史を繙く上での重要な手がかりになると期待される。またドイツの植民地主義という、日本ではあまり知られていないテーマについて、今後ドイツ語の授業やゼミの場で紹介し、最新のドイツ事情の発信を行いたいと考えている。